

杜若

作者 禅竹 場所 三河国八橋(現在の愛知県知立市) 季節 初夏 分類 三番目
杜若ノ精(シテ) 旅僧(ワキ)

伊勢物語 東下り(七～九段)

七 かへる浪かな

昔、男ありけり。京にありわびて、あづまにいきけるに、伊勢・尾張のあはひの海づらを行くに、浪のいと白く立つを見て

いとどしく過ぎゆくかたの恋しきにうらやましくもかへる浪かな (八)
となむよめりける。

八 あさまの嶽に

昔、男有りけり。
京や住み憂かりけむ、あづまの方に行きて住み所もとむとて、ともとする人一人二人して行きけり。
信濃の国浅間の嶽にけぶりの立つを見て、

信濃なる浅間の嶽にたつ煙をちこち人の見やはとがめぬ (九)

九 から衣

昔、男ありけり。その男身をえうなきものに思ひなして、「京にはあらし、あづまの方に住むべき国求めに」とて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくてまどひいきけり。三河の国八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木の陰におりみて、乾飯食ひけり。その沢に、かきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を、句の上にすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる、

から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ (十)
とよめりければ、皆人、乾飯の上に涙おとしてほとびにけり。

～ 「伊勢物語」(上)阿部俊子 講談社学術文庫 参照 ～

～ あらすじ

諸国遊暦の僧が、東国行脚にて訪れた三河国八橋。ここは伊勢物語の東下りに有名な杜若の名所である。そこで一人の女性に遭遇し、所の謂れなどを聞く。その女は泊まりの宿にと、僧を自らの庵に招きます。やがて女は在原業平と二条の後の形見の衣装を身に纏い自分が杜若の花の精である事を告げ昔語りを舞い語り夜明けと共に御法による成仏を現し消えます。

～ 舞台展開

ワキ「これは諸国一見の僧にて候。われ此間は都に候ひて。洛陽の名所旧蹟残りなく一見仕りて候。又これより東国行脚を志し候。タベタベの假枕。タベタベの假枕。宿はあまたに替れども。同じ憂寝の美濃尾張。三河の国に着きにけり。三河の国につきにけり。 急ぎ候間。程なう三河の国に着きて候。又これなる澤邊に杜若の今を盛と見えて候。立寄り眺めばやと思ひ候。げにや光陰とどまらず春過ぎ夏も来て。草木心無しとは申せども。時を忘れぬ花の色。顔佳花とも申すやらん。あら美しい杜若やな。

シテ「のうの御僧。何しに其の澤には休らひ給ひ候ぞ

ワキ「これは諸国一見の者にて候が。杜若の面白さに眺めあて候。さて此処をば何くと申し候ぞ

シテ「これこそ三河の国八橋とて。杜若の名所にて候へ。さすがに此の杜若は。名に負う花の名どころなれば。

色も一志ほ濃紫の。並べての花のゆかりとも。思ひ準らへ給はずして。取別き眺め給へかし。あら心無の旅人やな

ワキ「げにげに三河の国八橋の杜若は。古歌にも詠まれけるとなり。何れの歌人の言の葉やらん承りたくこそ候へ

シテ「伊勢物語に曰はく。此処を八橋といひけるは。水行く川の蜘蛛手なれば橋を八つ渡せるなり。その澤に杜若のいと面白く咲乱れたるを。或人かきつばたといふ五文字を句の上に置きて。旅の心を詠めと云ひければ。唐ころも着つつ馴れにし妻しあれば。はるばる来ぬる旅をしぞ思ふ。これ在原の業平の。此の杜若を詠みし歌なり。

ワキ「あら面白やさては此の。東の果の国々までも。業平は下り給ひけるか
シテ「こと新らしき問事かな。この八橋の此処のみか。なほしも心の奥深き。名所々々の道すから
ワキ「国々所は多けれども。取別き心の末かけて　シテ「思ひ渡りし八橋の　ワキ「三河の澤の杜若
シテ「はるばる来ぬる旅をしぞ　ワキ「思の色を世に残して　シテ「主は昔になり平なれども　ワキ「形見の花は
シテ「今ここに
地「あり原の。跡な隔てそかきつばた。跡は隔てそ杜若。澤邊の水の浅からず。契りし人も八橋の蜘蛛手に物ぞ
思はるる。今とても旅人に。昔を語る今日の暮やがて馴れぬる心かな頓て馴れぬるころかな
シテ「いかに申すべき事の候　ワキ「何事にて候ふぞ　シテ「見苦しく候へども。妾が庵にて一夜を御明し候へ
ワキ「あら嬉しや頓て参り候ふべし　物着
シテ「のうのう此の冠からきぬ御覧候へ　ワキ「不思議やな卑しき賤の臥所より。色も耀く衣を着。透額の冠を着し。
これ見よと承る。こは抑いかなる事にて候ぞ
シテ「これこそ此の歌に詠まれたる唐ころも。高子の後の御衣にて候へ。又この冠は業平の。豊の明の五節の舞の
冠なれば。形見の冠唐衣。身に添へ持ちて候なり
ワキ「冠からきぬはまづまづ措きぬ。さてさて御身はいかなる人ぞ
シテ「実はわれは杜若の精なり。植ゑおき昔の宿の杜若と。詠みしも女の杜若に。なりし謂の詞なり。また業平は
極楽の。歌舞の菩薩の化現なれば。詠みおく和歌の言の葉までも。みな法身説法の妙文なれば。草木までも
露の患の。佛果の縁を弔ふなり
ワキ「これは末世の奇特かな。正しき非情の草木に。言葉を交す法の声　シテ「佛事を為すや業平の。昔男の舞
の姿　ワキ「これぞ即ち歌舞の菩薩の　シテ「假に衆生となり平の　ワキ「本地寂光の都を出でて
シテ「普く濟度　ワキ「利生の　シテ「道に
地「はるばる来ぬる唐衣。遙々きぬる唐衣。着つつや舞を奏づらん
シテ「別れ来し。跡のうらみの唐衣　地「袖を都に。返さばや　イロエ
シテ「そもそも此の物語は。いかなる人の何事に由つて　地「思の露の信夫山。忍びて通ふ路芝の。始もなく終も
なし
シテ「昔男初冠して奈良の京。春日の里に知るよし志て狩に往にけり　地「仁明天皇の御宇かとよ。いとも畏き
勅を承けて。大内山の春霞。立つや弥生の初つかた。春日の祭の勅使として透額の冠を許さる
シテ「君の患の深きゆゑ　地「殿上にての元服の事。当時その例稀なる故に。初冠とは申すとかや
然れども世の中の。一度は榮え。一度は。衰ふる理の真なりける身のゆくへ。住みどころ求むとて。東の方に往く
雲の。伊勢や尾張の海面に立つ浪を見て。いとどしく過ぎにし方の恋しきに。羨ましくも。帰る波かなとうち詠め
行けば信濃なる。浅間の嶽なれや。薫る煙の夕景色
シテ「さてこそ信濃なる。浅間の嶽に立つ煙　地「遠近人の。見やは咎めぬと口ずさみなほはるばるの旅衣。三河
の国に着しかば。ここぞ名に有る八橋の。澤邊に匂う杜若。花紫のゆかりなれば。妻しあるやと思ひぞ出づる
都人。然るに此の物語。その品多きことながら。取別きこの八橋や。三河の水の底ひなく。契りし人々の数々に。
名を変へ品を替へて。人待つ女物病み玉簾の。光も。乱れて飛ぶ螢の。雲の上まで往ぬべくは。秋風吹くと。
かりに現れ衆生濟度の我ぞとは知るや否や世の人の
シテ「暗きに行かぬ有明の　地「光遍き月やあらぬ。春や昔の春ならぬ我が身一つは。もとの見にして。本覚真
如の身を分け陰陽の神といはれしも。ただ業平の事ぞかし。かやうに申す物語疑はせ給ふな旅人。はるばる来
ぬる唐衣。着つつや舞を奏づらん
シテ「花前に蝶舞ふ紛々たる雪　地「柳上に鶯飛ぶ片々たる金　序ノ舞
シテ「植ゑおきし。むかしの宿の。かきつばた　地「色ばかりこそ昔なりけれ。色ばかりこそむかしなりけれ色ばかりこそ
シテ「昔男の名を留めて。花橘の。匂うつる。菖蒲の鬢の　地「色は何れ。似たりや似たり。杜若花菖蒲こずゑに
鳴くは。シテ「蟬のからころもの　地「袖白妙の卵の花の雪の。夜も白々と。明るる東雲のあさ紫の。杜若の。
花も悟の心開けて。すはやいまこそ草木国土。すはや今こそ草木国土。悉皆成仏の御法を得てこそ。失せに
けれ。